
黒の獣と白の少女

白斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の獣と白の少女

【Nコード】

N7027R

【作者名】

白斗

【あらすじ】

金髪金目、黒い肌。異形の姿で生まれた少年は、すべてを捨てた。“あつち”と違い、“こつち”に人の姿はなく、人の言葉を理解する不思議な動物達が闊歩していた。そんな場所で、少年はある時、感情が欠如した不思議な少女と出逢う。これは、黒の獣と白の少女の狂った恋の物語。注：主人公がかなり最低です。

白の少女

金色の髪と瞳、黒い肌。

別にこの色を嫌ったことはない。…けれど、嫌な思いをしたことはあった。

自分の外見が異質であることは、幼い頃から自覚していた。祖母や叔母は黒目黒髪の黄色人種　モンゴロイドだというのに、自分だけが違うのだ。

当然のように、学校では外見をネタに虐められた、けれどそれは最初のうちだけだった。俺の通っていた学校はいじめに対して適切に対処してくれたらしい。そのおかげで俺に対する虐めはなくなったのだが、それでも人々の好奇の視線まではどうにもならなかった。初対面の人間は必ずといっていいほどに「もしかしてハーフ？」「どこの国の人？」という質問を投げかけてきた。

それに対する俺の答えは、いつも曖昧だった。
なぜなら、俺も答えを知らないのだから。

俺を育てたのは、母方の祖父母だった。俺が一歳くらいの頃までは、母親と一緒に祖父母の家に住んでいたらしいのだが、彼女はある日突然、失踪してしまったのだという。

父親に至っては顔さえ知らないのだが、俺の外見はおそらく父親の血筋によるものなのだろう。

おそらく、というのは祖父母らも俺の父親のことを何一つ知らないからだ。

母は高校生の時に俺を産んだ。彼女の妊娠と出産は祖父母らにとつて完全に寝耳に水の出来事だったらしい。しかも、生まれてきた子供は見たこともない髪と目、肌の色をしていた。祖父母らは激怒

して、母に向かつて「父親は誰なのか」と尋ねたそうだが、結局母は何も話さなかったらしい。

そして、母は俺を祖父母の元に残して姿を消した。

実の娘が生んだ子とはいえ、父親が誰かもわからない奇妙な色の子供。母がいればまだマシだったのかもしれないが、祖父母らが俺を見る目は厳しかった。虐待はされなかったが、彼らが俺に愛情を注いでくれることはなかった。ただ事務的に、面倒を見てくれただけだった。

だから俺は、すべてを捨てて、ここに在る。

歌が聞こえる。

聞いたことなんかないのに、それはまるで、子守唄のような優しい歌だった。

どこかから歌声が聞こえた気がして、俺は目を覚ました。

「……朝か」

寝入った時は真つ暗だった周囲が、今はうつすら明るくなり始めていた。太陽はまだ昇り切っていない ようだが、もう朝と言っても差し支えない時間だろう。

一瞬、二度寝しようかとも考えたが、起きた時に聞こえた歌の正体が気になって、結局俺は身を起すことにした。

俺が身を起すと、がさつという枯れ草を踏むような音がした。

当然だ。俺が寝ていた場所は森の中の、枯れ草の上なのだから。少し離れた場所には、昨夜暖をとるために作った焚火の燃えかすが残っている（火は寝る前に消した）。

「……」

そこで俺はあることに気が付いて、慌てて周囲を見渡した。辺りには木々が生い茂っているだけで何もいない。

「あいつ、どこ行った…!？」

俺は急いで立ちあがった。そのまま駆けだそうとしたが、その時また歌声が聞こえてきた。

「この歌…」

間違いない。さきほど聞こえた歌だ。俺は、歌が聞こえる方向に向かって、歩き出した。消え入るような、か細い歌声だったが、俺の耳にはしっかりと聞こえるのだ。

歌を追って、茂みをかき分けて進んでいく。すると、

「……」

茂みの先は、急な傾斜になっていた。危うく滑り落ちるところだった。

そして気付づく。歌声はこの下から聞こえる。

「……」

滑らないように気をつけながら、ゆっくりと下へ降りた。

「…探したぞ。お前、歌なんて歌えたのか」

俺はそこにいた人物に声をかけた。

けれど、その人物は反応しなかった。ずっと歌を歌い続けている。

「……」

俺は嘆息して、そっとその人物に近づいた。

そこにいたのは、白と赤を基調にした着物を纏った少女。髪は黒く、腰よりも長い。髪と同じく黒い瞳は、なんの感情も浮かんでいないように見えた。

少女は俺が近づいても身じろぎ一つしない。俺の姿が見えている

のかさえ疑わしい反応だった。いや、反応など全くしていない。

近くでみると、少女はボロボロだった。おそらくあの傾斜から落ちたのだろう。着物のあちこちは破れているし、顔にも小さな切り傷ができていた。

「おい、包帯が解けかけてるぞ」

俺は少女の右手を見ながらそう言った。

少女の身体は斜面から落ちたせいでボロボロだ。だが、それとは別に彼女は最初から全身の至る所に包帯を巻いていた。

右目から頭にかけて巻かれた包帯に、両手、両足の一部にも包帯が巻かれている。それは、俺が彼女と初めて会った時から付けたままだった。

少女は歌うのをやめた。そして、虚ろな顔で右手の包帯を見る。左手で包帯に触れるが、結び直すことができないようだ。

「……俺が結んでやる。手、出せよ」

そう言ったが反応はなかった。右手を見つめたまま、呆けたように動かない。

俺は少女の前で片膝をつく、勝手に少女の手をとった。少女は顔を上げたが、その目は自分の手を見ているだけで、俺に向かつて何かを言うこともない。無断で手をとったことに対する拒絶も許諾もなかった。それは今更驚くことでもないのだ。

俺がこの少女と初めて会ったのは、僅か昨日のことだった。

あの時の俺は、少し浮かれていたのだと思う。

すべてを捨てて“こつち”に来た時、俺は心の底から歓喜した。

幼いころからずっと居場所が無いと感じていた“あっち”から、俺はついに開放されたのだ、と。

だから俺は、普段なら絶対しないであろうことを 監禁されて

いた少女を助けるなんてことをしてしまったのだ。

理由はよく分からないが、この少女は何か良くないものに捕えられていた。それも、森の中にある古びた社のような場所で。いや、牢屋といっても差し支えないような場所に、こいつは全身包帯だらけの姿で監禁されていた。

俺は少女を助け出して、今に至るといっわけである。

思い返してみれば、俺の行動は浅はかで、馬鹿だったと思う。その時の俺は、自分を正義のヒーローだと思っていたのかもしれない。思い出しただけで恥ずかしいことだ。

けれど、

「きんいろ…」

包帯を結び直している最中に、少女が声をあげた。

「…ん？」

思考にふけっていた俺は、反応が一瞬遅れた。

この少女は初めて会った時から無口で無表情…：と言うより、まるで自我がない人形か何かのようだった。名前を尋ねても答ええないし、自宅や、監禁されていた理由についても尋ねてみたが、同じだった。その様子は、答ええないというよりも、聞こえていないという感じだった。さらに昨日は俺が手を引かなければ歩こうとさえしなかったのだ。

少女は何故こんなふうになってしまったのか。それだけ酷いことをされたのか。

だから今朝起きた時に姿が見えなくなっていて驚いた。しかもさつきは歌っていた。

「おまえ…今しゃべったのか？」

言いながら少女の顔を見ようとすると、少女は俺の顔をじっと見つめていた。

どくんっと心臓が跳ねた。

片方だけの黒い瞳で、少女はじつと俺の顔を見ている。昨日から一緒にいて、こんなことは初めてだ。

少女は包帯だらけの左手を伸ばして、俺の頬に触れる。（右手は俺が押さえているからそのままだ）さらに彼女は、自らの顔をゆっくりと俺の顔に近づけた。その黒い瞳には先ほどまでは存在しなかった光が見える。

俺は動くこともできず、彼女の目を見つめた。徐々に鼓動が速まる。

そして、少女が再び口を開く。

「きんいろ、の…め」

「っつ」

しかし、そこまでだった。

彼女の目から急速に光が失われ、再び虚ろな眼差しに戻った。同時に、俺の頬に添えられていた左手が落ちる。

少女の目はもう俺を見ていなかった。

それでも、俺はしばらく動くことができなかった。

喜んで、浮かれて、考えなしに助けてしまった少女。

しかも彼女はまるで人形のように感情のない子で、こんな少女をどうすればいいのかと途方にくれた。

けれど俺は、

この少女に出会ったことを全く後悔していない。

俺はこの少女を一目見た時から、どうしようもなく、惹かれていた。

理由なんて分からない。

理由なんて必要ない。

包帯が巻かれた彼女の右手を、強く握る。

俺は、この少女を手放したくないと思ったんだ。

白の少女2（前書き）

残虐描写あり。

この話はR15とさせていただきます。

白の少女2

ばしゃん。

川の水で顔を洗う。

少女の包帯を結び直したあと、俺達は川に来ていた。目的は飲み水の確保と少女の傷の手当てである。ついでに言つと寝起きなので顔を洗うことにしたというわけだ。

思えば、川で顔を洗うなんて“あっち”では考えられない行動だ。

“あっち”の川は汚れていることが多かったから。

けれど、この森の川は綺麗で非常に澄んでいる。匂いを嗅いで口に含んでみたが、問題なく飲めそうだった。

その時ふと、水面に映っていた自分の顔を見る。

金色の髪に、金色の瞳。黒い肌。

祖父母の容姿を見た限り、母の家系では絶対に生まれえないであろう色。

“あっち”に黒い肌や金の髪を持つ者がいないわけではない。けれど俺がいた場所ではモンゴロイドという黒目黒髪の黄色肌の人種が一般的だった。せめて俺がいた国が、多人種が多く暮らす“あの大国”だったのなら、俺の容姿の異質さを気にする人は少なかったかもしれない。

俺が祖父母と同じ色だったなら、俺は彼らに愛されただろうか、奇異の視線にさらされることはなかっただろうか。

学校でのいじめはなくなった。けれど、彼らから受けた言葉は今も忘れていない。

いつものようにそう思って、そして俺は苦笑した。

皮肉なものだ。

この色が原因で、俺は“あっち”に居場所がなかったのに、この色のおかげで、俺は“こっち”に来ることが出来た。

結論から言って、俺の容姿の原因は顔も知らない父親であることはほぼ間違いないだろう。そして 父親は“こっち”に関わりのある“何か”なのだ。だからこそ、俺は今ここにいることを許されているのだろう。

生きているのか死んでいるのかも分からない父親に感謝するべきなのか、それとも恨むべきなのか。

けれど、今の俺にはそんなことどうでも良かった。

さつき、あの少女が俺の顔を見て「きんいろの、め」と呟いた。

それは俺の目は確かに金色だ。だからあの少女は確かに俺を見ていた。

その時の少女の目には、光が 感情が宿っていた…ように見えた。

俺の目に対する畏怖や好奇の感情じゃない。あれは 。

俺は水面から目を離し、隣に座る少女を見た。

傾斜から落ちた時にできた傷や汚れは水で綺麗にしておいた。本当は塗り薬か何かがあればいいのだが、残念ながら持っていない。

酷い怪我ではないので、別に問題ないと思うが。

少女は何をするでもなく、ぼんやりと俺の隣に座っている。その瞳はあいかわらず虚ろで、何も見ていない。

濡れたままの手で、俺は少女の顔に触れた。当然、彼女の顔が濡れる。頬から水滴が落ちて、彼女はぼうつとしたままだ。

少女の顎に手をかけて上を向かせる。そしてその虚ろな瞳を覗き込む。俺の、金色の瞳で。

そうしてまたさっきのような反応を見せてくれることを期待していたのだが、少女の瞳に光が戻ることはなかった。それに少々落胆したが、俺はそこで彼女を離したりしない。俺はそつと両手を彼女の背中にまわして軽く抱きしめる（身体の至るところに包帯を巻いていたので、強く抱きしめることは控えた）。

少女の身体はやわらかく、そしてとても華奢だった。顔を寄せると、何故かいい香りがした。俺は片手を前に戻して、少女の手と絡める。

悪いことをしているという思いはなかった。思い浮かばなかったと言ってもいい。

彼女の肩口に口づけしようとしたその時、

「……なっ!?!」

俺は突き飛ばされた。

密着していた俺と彼女の間に距離ができた。絡めていた手が外された。

それでもまだ少女を抱いていたが、俺は驚きで目を見開いていた。彼女が、俺を突き飛ばした。包帯だらけのあの細腕で。

「なんで…っ」

俺は少女の顔を見る。けれど彼女は、全くの無表情で俺を突き飛ばしていた。

恐怖も嫌悪もなく、無表情で無関心で、俺を突き飛ばしたのだ。

「……おまえも」

俺は押し殺した低い声で呟く。

そして、

「お前も俺を拒絶するのか!?! さっきは、あんな……あんな目で俺を見ていたのに、そのお前が、俺を、俺の想いを拒絶するのかよ!?!」

少女の肩を掴んで叫んだ。金の双眸が怒りに輝く。

あの時の少女の目は、愛しいものを見る時の目だった。少なくとも俺は、そうだと思った。

だから、彼女が拒絶することが許せなかった。

俺は怒りで少女を押し倒した。

包帯を巻いている彼女の身体のことなんて、全く気にも留めずに地面に彼女の長い黒髪が広がった。

俺は彼女を地面に押さえつけて、じつと見下ろした。相当乱暴なことをしているのに、彼女の表情はかけらも変化する様子はない。

「お前は……」

『その娘を返せ』

さらに言い募ろうとした時、声が響いた。

声？

何か違和感があった。

「……誰だ」

俺は少女を押し倒したまま、どこかから聞こえた声に向かって尋ねる。

『その娘を返せ』

また声が聞こえた。けれど、俺の問いには答えていない。

やはり、何か違和感のある声だった。けれど今の俺には、その違和感の正体を考えられるほどの頭脳も、余裕もなかった。

そんなこと、今はどうでもいいんだよ。

この時俺の中にあっただのは、どす黒い怒りの感情だけだったから。

俺はゆっくりと身を起こす。周囲に視線を走らせるが、まわりには何もいない。少なくとも、俺の視界にはいない。

「質問に答える。お前は、この少女を監禁していたやつか」

もう一度質問する。すると、
『返せ』

また声が返っていた。さらに、

『返せ』

娘』

『娘を返せ』

『その娘は』

『娘は大切な、』

声が複数聞こえた。どれも同じようできて、違う声。声の主は複数いるようだ。

『“あの方”へ捧げる贄』

『生贄』

『“あの方”』

『もうすぐ会える』

『もうすぐ目覚める“あの方”への贄』

『だから返せ』

『そっだ』

だが、それがなんだ。

そう思った瞬間、四方から複数の影が飛び出してきた。そのまま俺と少女の周りを取り囲む。

それは、黒い犬のような姿をしていた。

『返せ』

『お前が攫った、』

『その娘』

『返せ』

『“あの方”への生贄』

『目覚める』

『“あの方”が』

『返せ』

『娘を返せ』

黒い犬は口々にそう言った。あの奇妙な声はこの犬達から発せられていたらしい。

犬達は苛立ったように地面を引っ掻いたり、歯を剥きだしたりしていた。

だから、俺は犬達に向かって微笑んだ。

「嫌だ。この少女は渡さない」

そうはつきりと断言した。

すると犬達は、一斉に唸り声を上げた。

俺はそんな犬達を静かに見回した。

彼らの爪で引っ掻かれたら痛いだろう。彼らの牙で噛まれたら血が出るだろう。下手すれば、手や足を食い千切られるかもしれない。少女に目をやると、彼女は俺に押し倒された時のまま、地面に仰向けで倒れていた。目は開いているが、やはり虚空を見たまま身動きもしない。

そうだ、そのままそこで寝ていてくれ。

俺は視線を少女から犬達に戻した。

「俺から、彼女を奪うことは許さない」
それが最後だった。
それが決定打。犬達は俺に向かって跳びかかる。
俺はそんな犬達を、

皆殺しにした。

俺の足元にはひくひくと痙攣する犬が、一匹いた。ああいや、これは痙攣じゃなくて、呼吸しているのだろうか。

息をしている犬はこの一匹だけだ。あとはすべて地に伏したまま動かなくなつた。

『お前は、なん、だ』

犬はひゅうひゅうと消え入るような声で呟いた。
けれど、それに答えてやる気はない。俺は冷たい目で最後の犬を見ていた。

その時、犬が何かに気が付いたように目を見開いた。

『あなたは、まさか、我がき』

犬は何か恐れおののくような口調で声を上げたが、言葉が途中でふつりと止まつた。

同時に犬の呼吸も止まつた。

そしてその瞬間、すべての犬の亡骸が融けた。見る見るうちに小さくなって、やがて消えた。

「……………」

俺は、犬を見下ろしていた姿勢のまま、しばらく動かなかつた。
犬達が融けて消えたことに驚いたわけじゃない。“こつち”に来てから、それくらいのことじゃいちいち驚かなくなつた。

俺が“こつち”に来て一番驚いたことは、俺自身のことだったか
ら。

“こつち”に来てから異様に感覚が鋭くなった。そして、身体能力が普通じゃなくなつた。明らかに普通ではない犬を一瞬で皆殺しにできるほどに。この力があつたから、巨大な三体の蛇が守る社に入り込んで少女を連れ出すことができたのだ。

犬達を殺したことで、若干頭が冷えた。

先ほどまでの身を焦がすほどの怒りはすでに沈静化している。

その代わり、悲しかった。辛かった。少女に拒絶されたことが。

その時ふわりと、いい香りがした。

「…なんのつもりだ？」

俺は小さく呟いた。

胸の内、一度は沈静化した怒りがふつつと再び湧き上がるのを感じる。

「さつきは拒んだくせに…同情のつもりか」

俺の目の前には、一人の少女がいた。白い着物で、包帯だらけの少女。あいかわらずの無表情で、彼女は俺の頭を両手で包み込むように抱き寄せていた。

なんなんだよ。無表情で、無関心で、俺が社から連れ出した時も、何の抵抗もしなかつたし、自分が怪我をしても顔色一つ変えなくてそれなのに突然俺を拒絶して…今は、自分から俺を抱きしめてくれた。

「お前、俺をおちよくって楽しんでるのかよ」

そう訊いても、彼女は答えてくれなくて。まるで機械仕掛けの人の形のようなのに、その両手も、身体も温かくて、呼吸とそれに伴って上下する胸の動きはすべて彼女が生きていることを示していた。

俺の中の怒りの感情が急速に萎んでいく。だけど、そんなの許せるか。

「ふざけるなよ…!!」

俺は叫んだつもりだったのに、その声は想像以上に小さく、震え

ていた。自分の目から落ちる滴は見なかったことにする。今はただ、じっとしている。本当は、少女の身体をかき抱きたいのに、またさっきのように拒絶されることが怖かった。だから、今の状態を少しでも長く保っていたかった。

彼女の暖かさを、少しでも長く感じていたくて。

白の少女2（後書き）

主人公は最低です。

闇の中より1

闇。

暗い闇の中に、複数の小さな光が浮かんでいた。

そこは一体どこなのか、夜の闇の中なのか、それとも深い洞窟の中なのか。はたまた、海の底か。

『 贄の娘が連れ去られたと聞いたが、それは真まことか？ 』

突然、空気が震えた。光と、複数の小さな光しかなかった場所に音が生まれる。

『 何？それは本当か 』

『 初耳だ 』

『 私毛 』

『 本当なのか？ 』

最初の音をきっかけに、次々と音が増えていく。音に合わせるかのように光が点滅したり、動いたりする。どうやらざわめいているようだ。

しかし、次の音が発せられると、ざわめきは収まる。

『 まさか。社を守っていたのは雨月あめづきの息子達だぞ、そんなことがあるものか 』

『 それもそうだ 』

『 一体誰が言いだした戯言だ？ 』

『 リオ様でしょう？ 』

『 おや、リオ様が 』

『 まったく、“我が君”がもつすぐ目覚めるからといって少し浮かれているのではないかね。冗談もほどほどにして欲しいね 』

『 私はそんなに嬉しくないよ 』

『 口を慎め、“我が君”に無礼だ 』

『そんなことより、リオ様はどうしてまたそんな御冗談を?』

『冗談ではない』

『何?...では訊き間違いだね』

まるで笑っているかのような音が響く。しかしその時、

『いえ、それは真ですよ』

しんと辺りが一瞬、静まり返った。

それほどまでに、最後の一言は、周囲によく響く音だった。

静まり返った中で、一番始めに聞こえたあの音が静寂を破る。

『雨月か』

『はい』

『やはりあの娘は連れ去られたのか?』

『そのとおりです。私の息子どもは死にました』

『上月、宙月、下弦の三匹すべてが死んだと?』

『さようでございます』

『...ふむ。それはもちろん、娘を攫った奴の仕業か』

『そうだと思います。社の封印が破れたあと、私はすぐに使いを飛ばして娘の行方を探しました』

『ほう。それで、見つかったのか?』

『はい。ですが、振り返ちにあったようで、すべて戻ってきました。再生させるのは難しいですね』

『再生させる必要はない。娘を連れ去った者の情報だけを抽出しろ』

『すでに完了しています。ただ...』

リズム良く響いていた音が、急に濁る。それに最初の音は訝しげに音を響かせた。

『何だ？』

『最後に消されたイの零号から、思わぬ情報が抽出されました』

『どんな情報だ？』

『あの方 “我が君” が、すでに御目覚めになられていると』

『まさか』

『私の使いが申すには、娘を連れ去ったのは“我が君” に違いないと……』

『……』

最初の音が沈黙する。すると、今まで黙っていた他の音が一斉に音を響かせた。

『“我が君” は深い眠りについてははずでしょう？』

『そうだ、我らの知らないうちに目覚めるなんて考えられない』

『“我が君” の力は絶大。“我が君” が目覚めれば、すぐに分かる』

『……あの恐怖はすぐに感じ取れる』

『でも、もし本当に目覚めていたら？』

『そんなはずない』

『あり得ない』

たくさんの音がうるさいくらいに響き渡る。

『そもそも、雨月の息子達は少々ツメが甘い所があった。どうせ相手の力を侮って、殺られたんだろ？』

『今はそんなことどうでもいい。問題は“我が君” のことだ』

『……気になったんだが、もし本当に娘を攫ったのが“我が君” だとして、何故逃亡する必要がある？あれは“我が君” の贄だ。連れて逃げる意味がない』

『確かに』

『あれは“我が君” のために我らが用意したものだからね』

『もしかしたら、“我が君” は目覚めたばかりで意識がはつきりしていないのかもしれないよ。それに、まだ“あの時” のお気持ちが安定していないのやも……』

『ああ、それで雨月の息子を殺してしまったのか』

『なるほど』

『納得している場合か？私は怖い。もしかしたら、またあんなことになるかもしれない』

『お前は臆病だな』

『雨月の息子達は“我が君”にお会いしたことがなかったらろう？不敬にも、敵と間違えて攻撃したのかもしれない』

『無礼な』

『それで返り討ちか。笑えるね』

『待て。まだ“我が君”と決まったわけではない。：雨月よ。貴様の使いが襲撃者の正体を“我が君”と判断した理由はなんだったのだ？』

『雨月は“我が君”に会ったことがある。使い達に、その記憶を写しておいたんだらう』

『私は雨月本人に訊いているんだが？爺おじいは黙っている』

『…ふん。若造が』

『で、どうなんですか、雨月』

ざわめいていた多くの音が、静かになる。

雨月という音の響きを聞くために、他の音は収まった。

すべての音が消えたのを待って、音が響く。

『…眼が、』

周囲によく響く音。雨月と呼ばれたものの音だ。

『金色だったそうです。私の記憶にある“我が君”と同じ、氷のような金の眼だったと。』

それを最後に、再び周囲は音の無い沈黙となる。

あたりに散らばる複数の光は、震えているように見えた。

闇の中より1 (後書き)

皆で語らい。

書いていて一番楽しい。

青の女

俺は、少女を連れて森を歩いていた。

彼女はずっと黙ったままだったので、俺も自然と無言になった。

「…そこ、樹の根が盛り上がっている。転ぶなよ」

声をかける時といえば、こんな時くらいだ。けれど、少女はそれを聞いているのかいないのか。上手く避けてくれることもあれば、平然と進んでいくこともある（当然、そうなると転ぶ）。どうやら彼女の認識能力にはムラがあるようだ。同時に、感情に關しても。

普段は人形のように無口無表情なのに、突然、何かに反応して感情を見せる。その切っ掛けは今のところよく分からない。

それはともかく、この雰囲気ははつきり言って暗い。

ただでさえ陰鬱とした森の中にいるというのに、無表情な少女と、暗い顔をした少年が二人して無言で歩いている光景はある意味ホラーだ。そう思うとますます気が滅入る。

少女の手を引きつつ、俺はちらりと彼女の顔を見た。そこにあつたのはもう慣れてしまった無表情。しかもそれを見て残念に思うどころか、俺は少しホツとしていた。

もしもそこにあつたのが、嫌悪の表情だったら。俺がしたことを思えば当然だが、そう考えるだけで恐ろしい。

けれど、例えそんな表情をしていても、俺はこの少女を手放すつもりはないのだろう。自分のことながら、何故こんなにもこの少女に執着するのか分からない。

……一目惚れというやつなのだろうか。

そう思つてすぐに俺はその考えを否定した。

俺は一目惚れというものを全く信じていない。一目見ただけで誰かを好きになるなんて、そんなもの、勘違いの思い込みに決まつて

いる。

「？」

何かの気配を感じる。じっと見られているようだが、危険なものではないだろう。殺気が感じられない。けれど、姿が見えないのが気にかかった。試しに声を上げようとしたその時、上の方から声が聞こえた。

『…この森で人を見るなんて何年ぶりかしら。“我が君”の威光もとうとう衰えたのね』

ばさばさという羽ばたきのような音も聞こえる。音のした方向に目をやると、木の枝に青色の小さな鳥がとまっているのが見えた。

「…小鳥か」

呟くと、小鳥は嬉しげにチチチツとさえずった。

『こんにちは人間さん』

「……」

返事をするべきか迷った。今までの経験から考えて、この小鳥がいきなり襲いかかって来てもおかしくない。それに、なんだろう、この違和感。小鳥がしゃべり始めてから、妙な違和感があった。

『……もしかして、私の“声”聞こえてないのかしら。もしもし？』

なかなか返事をしないので、小鳥は困っているようだ。表情は鳥なのでよく分からないが、何故かそんな気がした。

「…聞こえている」

『あら、そう。良かった』

チチチツと小鳥が鳴く。

まただ。この鳥の言葉には何か変な感覚がする。

そう思った時、俺は少し前にもこの感覚を感じたことに気が付いた。

先ほど襲ってきた、黒い犬がしゃべった時。

あの時も、今感じているような違和感を覚えた。その時はそれどころじゃない気持ちだったので、気に留めることはなかった。

『貴方もしかして、私達の“声”を聴くのは初めてかしら？』

小鳥は俺を見つめて、突然そんなことを言った。

「何？」

『違うの？』

小鳥が首を傾げるような仕草をする。

「……どうかな」

小鳥の言葉に適当に答えつつ、俺は違和感の正体が気になっていった。俺が違和感を覚えたのは、この小鳥と、黒い犬がしゃべった時だ。

“動物が人の言葉を話している”、という驚くべき事実はいまさらだ。違和感の理由はそれじゃないと思う。というより、俺は“こつち”に来てから、人の言葉を話さない動物に出会ったことがない。“こつち”ではそれが普通なのかと思っただくらいだ。

例えば、社やしろに近づいた時に襲ってきた三匹の蛇。

初めに相對した時は、大きさ以外はごく普通の蛇なのかと思っただが、彼らは俺に『人の一族が、どうやってこの地に入った？』と訊いてきた。

蛇がしゃべったことにただ驚いていた俺は、その問いに返事ができなかつた。

そんな俺に向かつて、彼らは突然襲いかかってきたのである。そのあとは、蛇たちが話しかけてくることはなかった。俺に殺されるその時まで。

だから次に動物がしゃべるのを聞いたのは、黒い犬に囲まれたあの時だ。

まともな会話こそしなかったが、あの犬も人の言葉を口にしていないはずだ。

しかしそこで、変な疑問が浮かんだ。

……本当にそうだったか…？

あの犬達は本当に人の言葉をしゃべっていたのだろうか…？

何かに気が付きそうだった。しかしその時、

『ねえ、どうしたの？大丈夫？』

小鳥の言葉ではつとした。思案に耽り過ぎた。

「ああ、大丈夫だ」

『そう？ならいいのだけど。それはそうと、見たところまだ若いみたいだし、この森へ来たのは初めてよね。みんなが積極的に話しかけることは少ないと思うし、貴方に“声”をかけたのは私が初めてかと思っただけだね』

小鳥がチチチツと鳴いて、羽をばたつかせた。

その様子を見て、俺はようやく違和感の正体に気が付いた。

ああ、そうか。この鳥はさっきからチチチツとしか言っていない。人の言葉なんて一言もしゃべってないじゃないか。

「テレパシー…みたいなものか」

ぼそつと呟くと、小鳥が目を瞬いた。（今気が付いたが、小鳥は緑色の眼をしていた）

『何か言った？』

「いや、なんでもない」

多分、間違ってない。小鳥の“声”は、脳に直接響いているような感じがする。これが違和感の正体だ。彼らは口ではなく、テレパシーのようなもので声を出している。

蛇の時は驚きが勝っていて気が付かなかったが、犬に感じていた違和感の正体もこれだろう。

『…ところで気になっていたのだけど、その女の子…』

その言葉に俺は内心で警戒する。少女の手を強く握った。

彼女は俺がしゃべっている間もずっと無言だった。小鳥と話して

いる間もちらちらと気にかけていたのだが、特に何の反応もなく、おとなしくしていた。

それとはかく、小鳥は急に少女に話を振ってきた。気のないそぶりを見せていたのに、やはりこの小鳥も少女を奪いにきたのかと身構える。

『貴方さつきからその娘の事はかり見ているんだもの。何か心配事でもあるのかと思ったら、それって包帯よね？怪我しているんじゃない？』

「あ、ああ…そうみたいだ」

『そうみたいって、分からないの？』

「彼女とは昨日会ったばかりだ。包帯はその時からしていた」

『そうなの？てつきり旅の連れかと思っちゃった。じゃあ、包帯も全然換えてないのね』

「ああ、持ち合わせがない」

『それは困ったわね。怪我の程度がどのくらいかも気になるし、包帯を換えないと良くないわ』

「…そうだな」

杞憂、だったのだろうか。この鳥は少女を奪いに来たわけではなく、偶然俺達と出くわしたただけなんだろうか。

『私が換えてあげてもいいかしら？』

「え？」

『包帯なら、多分私が持つてるから。巻き方も知ってるし、大丈夫だと思うの』

「あんたが？包帯を？」

あからさまに不審そうに疑問符を浮かべてやる。

小鳥が包帯を持っているなんて、変だろう。自分で使うとも思えないし、そもそもどうやって包帯を巻く気だ？翼はもとより、あの小さな足で包帯を巻けるわけがない。

表情から俺の心情を悟ったのか、小鳥はふふんっと自慢げに羽を広げて見せた。

『もちろん私には無用なものよ。だけど、私は以前から人間の文化に興味があつてね。いろいろ集めるのが趣味なのよ』

それは分かつたが、包帯を巻くのは無理だろう。人間のような手を持つていない小鳥には。

『私の住処に招待してあげるわ。ついてきなさい』

小鳥はそのことに気が付かないのか、平然と話を続けている。俺がいるのだから、包帯さえ手に入れば問題ないけれど。

『じゃあ、行きましようか』

そう言つと、小鳥は枝から飛び立った。そのままどこかへ飛んでいくのかと思いきや、小鳥はふわっと地面に降り立った。

人間の姿で。

「…なっ!」

『ふふふ、私だつて“てんべん転変”くらいできるのよ』

そこにいたのは、青い髪に緑眼の、青白い肌の妖艶な女性だった。

青の女（後書き）

少女の影が薄い。

しかし彼女はそこにいます。

マヤカシ(前書き)

この辺から、世界観の説明ターンが到来。
いままでなんのことやら分からなかった謎も少しずつ明らかに。

マヤカシ

「…人ひとに変身した？」

俺は目を見開いて、目の前にいる女を見た。

ふわふわとした青い髪はどことなく小鳥だった姿を彷彿とさせる。目は小鳥の時と同じく緑色で、肌は文字通り青白い色をしていた（別に顔色が悪いという意味ではない）。服装は簡素なワンピースで、あまり似合っていない。年齢は二十代後半と言ったところだろうか、妖艶な雰囲気を漂わせた美女だった。

確かに直前までは小鳥だった。それなのに、枝から地面に降りるわずかな間に鳥が人の姿になったのである。

『あら。その様子だと“転変てんぺん”を見るのは初めてなのね』

青い女は楽しそうに“声”を出す、その唇は全く動いていないし、表情もほとんど変わらなかった。

かなり異様な光景である。

女の方もそれに気が付いたのか、自分の顔をぺたぺたと触っている。

『うーん、表情を作るって難しいわね。小鳥の時は簡単なのに』
小鳥に表情なんてあるのか？というツツコミはあえてしなかった人にはきつと分からない。

『ま、いいか。手足はちゃんと動くもの』

そう言いながら手足を振ったり伸ばしたりしている。その姿を見て、少し露出度が高いワンピースだなと思った。

『それはそうと、さすがに“転変てんぺん”は見たことないのね。驚いた？』

青い女は人を驚かすのが好きな性分らしい。表情からは全く分からないが、心底嬉しそうな感情が脳に直接伝わってくる。

「…驚いた。今のはなんなんだ？」

ここまで来ると誤魔化す必要もないか。素直に答えておく。それに、自分は“こつち”のことを知らなすぎる。できるだけ情報を訊き出した方がいいかもしれない。

『“転変”^{てんぺん}そのものを知らないの？…あら、人の間ではもうそんなに長い年月が経っちゃったのかしら。この土地から人がいなくなつて、まだ数十年くらいだと思つてたんだけど。人と私たちでは感覚が違うのかしらね』

少し困つたような“声”が聞こえた。

『そつか。人はもう私たちのこと忘れちゃつたのね。人と仲良くしたいと思つてる私としては残念ね』

「それで、“転変”ってなんなんだ。お前は小鳥だつただらう？」
感傷に浸っているのかもしれないが、話を急かした。

『あら、私は小鳥じゃないわよ？もちろん人間でもない。ある意味では、小鳥でもあり、人間でもあるのだけれど』

「どういう意味だ？」

『立ち話もなんだから、歩きながら話すわよ』

そう言つと、女はしっかりと足取りで歩き出した。表情を動かすのは難しいらしいが、それ以外は問題ないようだ。

俺は一瞬、このまま素直について行くべきか悩んだ。

この女が本当に俺から少女を奪いに来たわけではないという確信が持てないからだ。

ああ、だけど。

その時はまた殺せばいいかと思つた。どうせたいしたことはないだろう。蛇や犬達だつて、簡単に殺せたのだから。

そう思つて、俺は心中で苦笑する。

俺の思想は“こつち”に来てから、どんどん危うくなつていた。けれど、別にいいかと思つた。

そして俺は、青い女を追つて少女と共に歩き出した。

『人はかつて、私達のことを“マヤカシ”と呼んでいたの』

「マヤカシ？」

『…本当に知らないの？それ以外にも“化物”とか、“魔獣”とか、いろいろあったと思うけど、“マヤカシ”ってというのが主流だったと思うわ。私自身が気に入っていたしね』

名付け親はこいつじゃないだろうか。

『私達は生まれた時は決まった姿なんて持ってないのよ。だから鳥でもあり、人でもあると私は言ったの。生まれてからしばらくすると、私達はそれぞれ気に入った姿をとるようになるの。それが私の場合には小鳥だったって事。』

「でも今は人の姿だな」

『そうね。普通は一度姿を得るとずっとその姿でいるものよ。というより、その姿でしかいられないというべきかしら。姿を形作るのはそれだけ大変なのよ。』

だから、と青い女は続ける。

『複数の姿を持てるものは、それだけ膨大な力を持っているという証でもあるの。私は小鳥の姿とこの人の姿の二つしか持ってないわ。どっちも私であり、どっちも私ではない姿。見えてる姿が本当ではない。まるで“まやかし”のようでしょう？』

「…へえ」

『“転変”とは、私達が他の姿に変わることの意味する言葉。“転変”できる“マヤカシ”はとても少ないの。私はその数少ない“マヤカシ”ってこと』

女は自慢げに言う。

俺は、今の内容で少し気になったことがあった。

「つまり、あんたはそれだけ膨大な力を持つてるのか？」

『まあね。ああ、安心して。貴方達に危害を加えるつもりはないから。他の“マヤカシ”が縄張りに入ってきたとかならともかく、貴方達は人間だもの。歓迎するわ』

とりあえず、その言葉を今は信じておくことにした。だが、下手をするとこの女は先ほど俺が倒した黒い犬や蛇たちよりも強いのか

もしれない。用心しておこう。

『それにしても、私達のことを全然知らないなんてね。……私達の所業を思えば、それはそれで良かったのかしら』

「……？」

最後の方は無意識の呟きだったようだ。言った後に少し焦ったような意識が伝わってきた。口で直接話しているわけではないので、少しでも伝えようという想いがあると伝わってしまうらしい。

『ええと、“転変”すると、私達は全然違う姿になるわけだけど、たった一つだけ変わらないものがあるのよ』

言いこぼしたことを誤魔化すように話を続けてきた。少し気になったが、今の話も気になるので、あとで改めて訊くことにする。

それに、今は強引に話を戻したように感じた。何か人に対して後ろめたいものがあるのかもしれない。

『今の私の外見を見てちょうだい。さっきの小鳥の姿と共通するものがあるでしょ？』

そう言っ、前を歩いてた女はこちらを振り返った。

「…眼の色や、髪の色が小鳥の時と同じだ」

小鳥のときは青い羽毛に覆われていて、眼は緑色。そして、今の人の姿は青い髪と肌、それに緑色の眼である。身体の色が共通している、と言っていいだろう。

俺がそう言っ、女はニヤツと笑った。さっきと違って、自然に笑えるようになってる（こっさり練習でもしていたのか？）。

『そのとおり。さっき、私達は姿を持たずに生まれてくると言っただけれど、唯一“色”だけを持って生まれてくるの。それはどんな姿になっっても変わらない。“色”は私達にとって唯一本当と言えるもののな』

「……」

俺は、少し不愉快な気分になっ。

『どうしたの？疲れちゃっ？』

「…別に」

不機嫌が声に出ないよう気を付けたつもりだったが、どうだろう。
『そう。ならいいけど』

あっさりと引き下がったので、少しほっとする。

この女は“色”の話をした時、まるで誇るように話していた。たった唯一の大切なものだとも言っように。
「……………」

言いようのない苛立ちを感じる。

俺は、片方の手で、まぶた瞼越しに自分の眼に触れた。異質な“色”を持つ、金色の眼に。

“こつち”では、別に異質でもなんでもないのであるかもしれない。青い女は俺を見ても平然としているし、彼女の姿だって“あつち”なら十分に異質だ。

この色は嫌いじゃない。嫌ったことなんて…ない。

『ほら、着いたわよ』

「あ、ああ」

いつのまにか目的地に着いたらしい。

「…ここは？」

目の前には白い湯気を立ち昇らせる泉があった。どうみても、風呂 いや温泉だった。

『この泉、不思議でしょう？熱い水が湧いてくるのよ』

こいつは温泉を知らないのか？

そう思ったが、こんな森の中で、しかも小鳥の姿で生きてきたのなら知らなくても不思議はないかと考えなおす。

『熱くて少し驚くけれど、浸かると気持ちいいし、怪我にも効くの』

「ここがあんたの住処なのか？」

温泉の中で暮らしているわけじゃあるまい。

『ここらあたり一帯が私の縄張りよ。包帯を取ってくるから、こ

こで少し待つてなさい』

女はそう言うと、ぴょんつと跳躍して近くの木の上に飛び乗った。そのまま軽々と上に登っていき、姿が見えなくなる。

「…身軽だな」

人間じゃないというのだから、これくらいできて普通なのだろう。しばらくすると、ガサガサと木の葉を揺らして上から落下してきた。

『はい。この中に入ってるからどうぞ』

地面に着地する寸前にふわつと身体が浮かんで、着地の衝撃を和らげたように見えた。

青い女は手に白っぽい小さな箱を持っていた。箱の表面には文字らしきものが書かれているが、残念ながら読めない。見たことのない文字だった。

『ずーと前に人から貰ったの。使えると思うんだけど』

ずっと前って、大丈夫なのか。包帯に使用期限があるのかどうか不安である。

女は箱を開ける。箱の中には包帯だけではなく、何かの薬と思われるものがたくさん入っていた。けれど、どれが何の薬なのか俺には判断が付かない。とりあえず、包帯だけあればいいだろう。

『じゃあ私が巻きなおしてあげるわ。包帯取ってもいいかしら？』

青い女は少女に向かって声をかけた。

思えば、この女が少女に声をかけたのはこれが初めてだ。最初に声をかけてきた時は俺と少女の両方に向かって声をかけていたのかもしれないが、返事をしたのが俺だけだったせいだ、その後は俺に向かってだけ話をしていたように思う。そういえば、少女の怪我の事を訊く時も、普通なら当人に直接訊くだろうに、何故か俺に訊いていたな。

『…あら、無反応ね。最初から全然しゃべってくれないと思ってたけど、人の間にはそういう習慣でもあるのかしら』

その言葉に少女のことをどう説明していいものか悩んだ。

「いや、彼女は誰に対してもこんな感じなんだと思う。理由は分からないが、普通より感情が乏しいみたいなんだ。全然しゃべらないし、表情もほとんど動かない。病気かもしれない」

「そうなの？貴方に対しても、何の反応もしないの？」

「……ああ」

「ふうん」

青い女は不躰なほどに少女を見ている。ついで、俺のこともじろじろ見る。一体なんだというのだ。

「じゃあ、やっぱり貴方に訊くけど、包帯取ってもいいかしら？」

「それは俺がやる」

「ええ？」

女は不思議そうな“声”をあげた。

「なんだ？鳥のお前に任せるよりも、俺がやった方がいいと思うが」

しよせん人でないものに人の怪我なんて分かるものか。この女は人の文化に興味があると言っていたが、そんな遊び半分の知識よりも、俺の知識の方がマシな気がする。医学の心得はまったくないけれど。

「……この娘この包帯こって、身体中に巻かれてるわよ？」

「それが？」

何が言いたいのか分からない。

「ふーん……。私の知識では、人の女は男に肌を見せないものだから、あるけど……私の勘違いかしら」

包帯を換えるということは、服を脱がす必要がある。

ようは、俺が少女の裸を見ることになってもいいのか、と訊いているのだ。

「……」

失念していたわけではないが、まさか化物にそんなことを言われるとは思わなかった。

「だから私が巻いた方がいいかなと思ったんだけど」

女はニヤニヤしながらこっちを見ている（その笑い方は人間の笑いそのものだった）。

化物のくせに、妙に人臭いやつだ。

闇の中より2

再び、深い闇の中。

無数に蠢く光は、以前より少し増えている。

重苦しい音が響く。

『襲撃者：“我が君”らしき者の居場所は分かったのか？』

『…申し訳ありません。いまだ、確認できず』

『ほう』

僅かな沈黙ののち、嘲るような音が鳴る。

『無能だね』

『まだ見つからないなんて、おかしくないですか？』

『そうだね。使いが消滅した場所は分かっているのでしょうか？そこから追跡することは簡単じゃないのかね』

周囲の雑談を機にすることもなく、二つの音は鳴り響く。

『途中までの足取りは分かっています。しかし…』

『…ふむ。確か、社のすぐ側には“緑新”の縄張りがあっただろう。アレが襲撃者を匿っているかもしれない』

周囲に音が連鎖する。

『緑新…？』

『誰です？』

『人に感化されて、我らの本質を見失った哀れな奴だ』

『どうせ脆弱な奴なんだろう？そういう奴らはこぞって人の考えに同調して、我らの本質を否定する』

『その通り』

『哀れな奴らだよな』

『自らを人と思ひこむことで、助かるうとしている。その行いが最も恥ずべき行為だと何故分らないのか、理解に苦しむ』

『でも、緑新は“転変”できるだけの力は持っているよ』

『へえ？そりやおもしろい。じゃあ、上月を殺したのはそいつかい？』

『緑新が？』

『殺したのは“我が君”では…？』

『まだ決まったわけじゃないだろう。軽率な考えはよせ』

『そうだ』

『雨月つづきは、金色の眼を見たと言っていたぞ』

『しよせんかりそめ仮初の命を与えられた形代かたしろの言うことだ、見間違いと
いうこともあり得る』

『見間違い…そんなことがあるだろうか』

『我が君”以外に金の眼を持つ同胞がいるとは思えない』

『絶対にいないと言い切れんぞ』

『緑新の眼は金色なのですか？』

『いや、確か緑だったはずだ』

『ではやはり“我が君”が』

『だから軽率だと言っている』

『まどろっこしいな。俺が緑新を叩き伏せてくる』

『何だと？』

『それが一番早くて確かな解決方法だと思うのだが？どう思いま
すか、リオ様』

『……』

リオと呼ばれた音は答えない。

他の音も、いつこうに響こうとはしなかった。

静寂にじれたのか、再びリオに進言した音が鳴る。

『仮に何の関係がなくとも、人間に与する奴らは我らの同胞とは言えません。あとあと何をしでかすかもわかりませんし、今のうちに排除しておいてもいいのでは?』

『…では、ディフロス。お前が行って確かめてこい。緑新のことも、“我が君”のことも』

『ありがとうございます』

不気味な赤い光がひときわ輝いて見えた。

闇の中より2 (後書き)

次回はデイーさんが大活躍するかもしれない。

お前は何だ？（前書き）

4月11日、後半の一部を変更しました。たいして変わってないですが、前よりも読みやすくしたつもり。

お前は何だ？

無表情の少女を見つめながら、青白い女　　緑新は難しい顔をしていた。

その視線は少女の腕に注がれている。彼女の腕の包帯はすでに取り払われている。

…やっぱりね。

緑新は少女の腕を見ながら、心の中でそう呟いた。伝えようという意思がなければ、声が他者に聞こえてしまうことはない。

緑新は憐れむような目を少女に向け、そっと頬に触れる。少女は無感動にされるがままじっとしている。いや、動きたくても動けないのだ。

少女の魂は、ズタズタに傷つけられてしまったのだから。

緑新は少女の頬を優しくなでる。

『…ごめんなさい』

少女に向けて、そう“声”を発する。まるで泣きそうな“声”で。さらに何かを言おうとした時、

「おい、まだ終わらないのか」

少し離れた場所から、声をかけられた。

この少女と一緒にいた、あの少年の声である。

その声を聞いた緑新はガラリと表情を変えてこう返事した。

『まだよー。今脱がせたところ』

すると、ちっという舌打ちの音がワザとらしく聞こえてきた。ついで、不機嫌丸出しの声が続く。

「…はやくしろ」

『わかってるわよ。だけど、手荒に扱っなって言ったのは貴方でしょ？』

そう切り返すと、少年は反論に困ったのか何も言い返してこなかった。それに緑新は面白がるように笑みを浮かべ、何事もなかったかのように少女の包帯を取り換える作業に移った。

俺はイライラしていた。

それもこれも、すべてあの女のせいだ。

あれから結局、あの青い女が包帯を換えることになった。

さらに、包帯を換える間、俺は少し離れた場所で後ろ向きに待たされることになってしまった。

俺が不満そうな顔を見ると、女は温泉を指しながら言った。

『なんなら、待っている間に泉にでも入ってる？気持ちいいわよ』

「結構だ。彼女をお前に預けたままで、そんなこと出来るか」

『あら、この娘と一緒に入りたいの？』

また意地の悪い笑みを浮かべて何を言っているんだコイツは。

「…違う」

『分かってるわよ。貴方、私のことが信用できないんでしょ？』

「ああ」

ここで嘘をついてもバレバレだと思ったので、はっきり肯定しておいた。この女の前で温泉に入るなんて、無防備なことはしたくない。

『だったら足だけでも浸かったらどう？それならいいじゃない。ただ待つてるのは暇ひまでしょ？』

そうして今に至る。

俺は彼女達から背を向けて温泉に足を浸していた。あの女には言いたくないが、確かに気持ちいい。お湯は丁度よい熱さで、身体がホカホカしてくる。

知識として知っていたが、実際に温泉に入るのは初めてだった。

「…おい。今何をしてるんだ」

もう何度目か分からないが、俺は背後にいる青い女に声をかけた。女の方からすれば、こう何度も声を掛けられるとウザいと思うが、そんな配慮をしてやるつもりはない。時々声をかけなければ、何があるか分からない。

『何してるって…聞きたいの？今彼女の胸の包帯を取ってるんだけど、彼女、かなり大きい…』

「そこまで聞いてない」

馬鹿なことを言ってるんで、本当に早くして欲しい。

…へえ。胸大きいのか。包帯のせいで、服の上からはよく分からなかったな。

ちらっとそう思ってしまったのも事実だ。

思い浮かんだ光景を誤魔化すように俺は足を軽く動かす。お湯がぱしゃつと跳ねる。まるで子供みたいなことをしているな、と俺は小さく笑う。

その時、ざあつと風が吹いた。それと同時に妙な悪寒を感じた。身体は温泉のお湯で暖かいはずなのに、なぜだろう。

その悪寒に言いようのない不安を煽られて、俺はまた女に声をかけようとした。

『…もう半日くらい待ってってくれるかと思ってたんだけど、私の考えが甘かったようね』

先に女の方が俺に声をかけてきた。何を言っているのか、意味が分からなかったが。

『もうこっち見ていいわよ。包帯換え終わったから』
そう言われたので、素直に振り返る。

そこには綺麗に包帯を巻かれた少女と、あの女が立っていた。本当にもう終わったらしい。

少女の様子が気になり、俺はさっさと立ちあがって彼女達に近づいた。

少女は相変わらずの無表情だが、青い女の方も、何故か無表情だ。さっきまでの憎らしいほどの笑みはどこへ行ったのか。

『…状況が変わった。ねえ、貴方の名前を覚えてくれないかしら？』

「言いたくない」

そう言いながら、俺は眉を寄せた。どうして今更、そんなことを訊くのか。

『…なら仕方ないわ。これからも人間さんと呼ぶことにするわ。』

それで、私の名前は緑新よ』

女はあっさり引き下がった上に、自分の名前を名乗ってきた。

だからなんだと言うのか。俺はお前の名前なんて知りたくもなかったし、必要以上に慣れ合うつもりもない。包帯を巻く作業が終わり次第、早々に立ち去りたいのだ。それだけの付き合いの相手と名前を名乗り合う必要を感じない。

「ふうん、そうか」

だからそっけなくそう返事をしておく。

それで青い女 改め、緑新に対する俺の興味は一切失せた。少女をこちらに引き寄せ、じっと見る。心配していた包帯はきちんと巻かれている。

そういえば、俺はこの少女の名前を知らないな。

彼女が自分から名乗ってくれる可能性は少ないし、俺が名前を付けてもいいだろうか考える。

『貴方はこの娘のこと、どう思ってるの？』

「は？」

何の脈絡もなく、先ほど以上に唐突な質問を受けた。

「何故そんなことを聞く？」

名前を訊いたかと思えば、一体何なんだ？

『これは大事なことよ』

緑新の“声”から、酷く緊迫した感情が伝わってきた。

『貴方は、この娘をあこの社から助け出した。それが、どういことか分かってるの？』

その言葉を聞いて、俺ははっとした。

「やはり、お前も……」

すぐにでも少女を抱えて飛び退きたい気持ちを抑え、俺はなるべく冷静にそう呟いた。

『その様子だと、すでに追手と遭遇したのね。なら、この娘こを連れていることの危険性は、それなりに理解しているのよね？』

俺は、ただ緑新を睨みつけていた。奪われないように、少女を背後に庇う。

『それでも、貴方はその娘こを守るの？』

「俺から彼女を奪うことは許さない」

強い口調でそう言うと、緑新が一瞬たじろいだように見えた。さらに、驚いたように瞬きを繰り返している。

『覚悟…は、あるようね。でも、あなたはその娘こが何なのか知っ

てるの?』

そう言われて、俺は返答に迷う。

彼女は何かに捕まっていた。それも酷く良くないものに 何故
そう思ったのか自分でも分からないが、彼女の姿を見た瞬間、俺は
助けなければいけないと確信していた。今でもそれは勘違いではな
かったと思っている。

彼女が何者であっても、俺は彼女を手放すつもりはないが、彼女
のことを何も知らないままでもいいのか。

「……知らない。だが、関係ない」

少し語調が弱くなる。俺は、彼女の名前さえ、知らないんだ。

緑新は探るような顔で俺のことをじっと見つめていたが、俺の答
えを聞くと、ふっと息を吐いて僅かに安心したような顔になった。

何故だ?

緑新は少女に目を向けた。

『その娘は、狂ってしまった“我が君”を慰めるために用意され
た大切な贄』

「……我が君……?」

その言葉には、聞き覚えがある。そして、贄という言葉にも。そ
うだ、あの黒い犬や、目の前にいる この女も最初にこの言葉を口
にしていたはずだ。

我が君とは確か、主君しゅくんに対する敬称ではなかっただろうか?

「我が君……って何なんだ?」

今更な問いだったかもしれない。今思えば、その言葉は何度も耳
にしていたのだから。

すると緑新は怪訝な顔つきになる。

『本当に、何も知らないの……? 我が君のことでさえ? ……貴方
は一体何なのかしら……』

『 それは俺も気になるな。お前は本当に“我が君”なのか？』

唐突に脳に響いてきた“声”に俺は反射的に少女を抱えて飛び退いた。その判断は正しかったのだと、一瞬後に理解する。

さっきまで俺達が居たところは、地面が抉れて、窪んでいた。

そして、その場所には、巨大な何かがいる。

温泉の湯気と地面が抉れた時に舞い上がった砂埃でよく見えないが、とても大きな動物がそこにいるのが分かる。

『 リオ様が直接来ることはないと思つてたけど。…成程、貴方が来るなんてね、ディフィロス』

姿は見えないが、緑新がそう呟いたのが聞こえた。

『 ほお。その様子だとお前は俺を知っているのか？あいにくと俺はお前を全く知らなかったが』

次に聞こえてきた“声”は知らない“声”だ。たった今現れた動物：いや、緑新と同じ“マヤカシ”の“声”であることは確かだ。

『 知らなくても無理ないわよ。私は、貴方達の集会には参加していなかったから』

『 “参加していなかった”？ “参加できなかった”の間違いじゃないか？』

見下すような響き。

次いで、ギチギチという嫌な音が響く。

『 貴様のような奴は目障りだが、今はこいつらに用がある』

ゴウツと風を切る音と共に、湯気と砂埃が散る。

そうして露わになるのは、じろつとこちらを見下す、血のような赤い眼。そこに居たのは、巨大な白い体躯の、化物^{ばけもの}。

そう 化物だ。蛇でもなければ犬でもなく、緑新のような小鳥でもない。それは少なくとも、俺が知っている動物の姿をしていなかった。

あえて例えるなら、その姿はウサギに似ている。長い耳と跳躍力

が強そうな足の形はウサギそっくりだ。だが、その口にはウサギにはない鋭い牙があり、前足は鷹のような鉤爪かぎづめ状になっている。身体は熊よりも大きく、象ゾウと同じかそれ以上はあるだろう。その化物は赤い眼を細めてこう呟いた。

『 さて、お前は“我が君”か？ 』

白の化物（前書き）

読みやすさを考慮して、今回から台詞の前後を改行して表示する
ことにしました。

白の化物

『 さて、お前は“我が君”なのか？』

不気味な赤い眼で見下しながら、そう訊いてきた化物^{ばけもの}。

問い意味が俺には分からない。だが、その場の様子からして、とてもそう言える状況ではない。

どう答えるべきか悩んでいると、化物は馬鹿にするような哄笑を上げた。

『 …愚問だったな。お前が“我が君”のはずがない。どこからどう見ても、お前は人間だ』

ギチギチという不快な音が辺りに響く。これがあの化物の鳴き声なのだろう。

どこからどう見ても、俺が人間だと…？

俺は、化物の言葉に疑問を感じた。

外見のことなら、緑新の姿だっけどう見ても人間だ。もし彼女が最初からあの姿だったなら、俺は彼女を人間だと思っただろう。

“マヤカシ”には本当の姿などないと言っていた。ならば、彼らはどうやって同族を見分けているのだろう。

化物はひとしきり笑うと、鋭く尖った前足を近づけて、こう言った。

『 人族の子よ、その娘を渡せ。今渡せば、今回だけは見逃してやつてもいいぞ』

その言葉を聞いて、俺は瞬時に気持ちを切り替えた。最初から確信していたが、こいつは緑新と違って、明らかに少女を狙っている。あの黒い犬達と同じく、俺から少女を奪いに来たのだ。俺は化物に向ける視線に殺気を含ませる。さらに、少女を抱えた手に力を込めた。

それを見た化物はスツと目を細めて口元を歪めた。おそらく笑っている。

その時、とんつと軽い音がして、目の前に緑新が落ちてきた。そして、俺達を庇うように両手を広げる。

『……一応聞いておくが、上月達を殺したのはお前か？』

『いいえ、違うわね』

何の話をしているのか分からないが、緑新がそう言つと、化物は驚いたような声を上げた。

『では、その人間が殺したのか？』

『…私は何も見てない』

緑新がそう答えると、再び化物がギチギチと笑う。

『それはそうだ。あそこはリオ様の縄張りだ。お前が入れるわけがない。…そうか。その人間が上月達を、ね。これは楽しめそうだ』

『彼らに手出しはさせない』

緑新は強い意思の籠った“声”を発した。

化物はその言葉を予想していたらしく、まったく動じなかったが、俺は驚いた。

何故、彼女が俺達を庇う？

理由が分からない。

彼女の言葉を信じるなら、“マヤカシ” は個々に縄張りを作って生きる種族のはずだ。となると“マヤカシ” 同士で仲が良いとは限らない。縄張り争いでいがみ合うことの方が多いのかもしれない。だから、彼女がこの化物のマヤカシに対して敵意を向けるのは理解できる。だが、何故俺達を庇うのか、その必要性が感じられない。

人間に興味があるからか？ 人と仲良くしたいと言っていたが、それが理由か？

俺が思考を巡らせていると、化物が“声” を発した。

『なら、お前は俺と戦ってみせるのか？』

挑発的な言葉。それと同時に、化物は鉤爪状の前足を緑新に向けて振り下ろした。緑新は避けることもなく、それを見ている。

どんつと空気が震えた。

『さぞかしい気分だろうなあ、自分を人間だと思い込むことは。出来ることなら人間に生まれたかっと思いつながら、毎日震えて生きているのだろうか？』

ギチギチという不愉快な笑い声と、侮蔑を含んだ声が響く。

『……………』

振り下ろされた化物の前足は、緑新が無言で受け止めていた。

彼女は身の丈ほどの前足を両手で押し留めている。その表情は背を向けているため、こちらからは見えない。

『我らの誇りを亡くした、哀れな同胞よ。そうまでして、生き延びたかったのか？』

化物の声からは侮蔑と皮肉の意が感じられた。

『それは違うわ』

『…ほう？何が違う？』

『私は、自分を人間だと思ったことなんて、一度もない』

『へえ？』

『人間になりたいと思ったこともない』

緑新の声には迷いが無い。思ったことをそのまま伝えようとしている。

『ならば何故、そんな姿をしている？それは人間の姿だ。お前の噂も聞いている。かつてお前は人間と交流を深め、人間の文化を学ぼうとしたそうだな。人間になるための勉強というやつだろう？』

『違う。私が、人を好きだからよ』

凜とした響きが届く。緑新は化物に向かって言い続ける。

『私は人が好き。私達に匹敵する知能がありながら、私達とは違う価値観や文化を持っている彼らがとても興味深くて、面白くて、愛おしくて、大好きよ。そう思えるのは、私が人じゃないから。私が入ったのなら、私はきっと今のように人を好きになることはなかったわ』

『私は、マヤカシである自分を否定したりしない。マヤカシとして生まれたことは、私の誇りよ』

相変わらず、彼らが何の話をしているのかよく分からない。けれど、自分を肯定してみせる緑新を見て、俺はまた、言いようのない不快感を覚えた。

彼女の言葉は眩しくて　とても憎らしい。

『…ならば、お前は我らの誇りを亡くしていないのだな？』

『ええ』

『だったら、お前は我らの側がわなのか？』

『　違ちがうわ』

言うより早く、緑新は押さえていた化物の前足を放り投げた。そして、流れるような動作で跳び上がり、化物に蹴りを叩き込む。

象ほどの大きさのある化物が、その蹴りを喰らって吹っ飛ぶ姿はなんと凄まじい光景だった。

蹴り飛ばされた化物は、ばしゃんという大きな水音を立てて、泉の中に落ちる。

『私はマヤカシである自分が好き。だけど、貴方達のことは大嫌い』

緑新は化物が落ちた泉を見つめながら、吐き捨てた。

外見こそ恐ろしげな化物だったが、人間の姿をした緑新の蹴りをたった一撃受けただけで、こつも簡単に吹き飛ぶとは。

あの化物からは、かなりの気迫と強さがあると感じられたのだが、

緑新の力はその上を行っていたということだろうか。

だが、あまりにもあっけない。

緑新もそう感じているのか、彼女はこちらに背を向けたまま微動だにしない。

『…貴方がそんな簡単にやられるわけないでしょう。いつまでもうして隠れているつもりなの？』

そう言つて緑新は泉を睨む。

温泉である泉の水（お湯だが）は元から白っぽく濁っているの、上から覗いただけでは化物の姿が見えない。

だが、化物の身体がすっぽり隠れてしまつほどの深い泉ではないはずだ。意図的に隠れているにしても、無理がある。

緑新も、それには気が付いているはずだ。彼女は警戒しながらも、泉に一步近づいた。

しかし、突然こちらを振り返つて叫んだ。

『…っ、下がりなさい!!』

それとほぼ同時に、足元の地面から白い棒のようなものが飛び出した。

「!?!」

それが何なのか分からなかったが、反射的に退こうとした。けれど、何故か足が動かず、バランスを崩してつんのめった。

その時、抱えていた少女の手を離してしまった。慌てて抱え直そうとしたが、今度は両手が動かなくなり、そのまま少女を地面に落

してしまつ。

「……………!」

俺はその時、少女の名前を叫びたかつた。

けれど、俺は彼女の名前を知らない。だから、呼びようがない。

地面に投げ出された少女は起き上ろうとしない。

本当ならすぐにも少女を抱え起こしたかつたが、両手両足が動かない。

「…っ、なんだこれ」

俺はようやく気が付いた。

自分の身体に巻きついている白いモノの存在に。

ギチギチという不快音が、間近で響く。

『うかつだった、貴方がそんな姿を持っているなんてね』

緑新が動揺した様子で、こちらを見ていた。

そして、気が付く。自分に巻きついている白いモノの正体が何なのか。

『さて、人間。上月達を殺した時のように、俺の相手をしてくれるかな?』

耳元で囁かれた声は、実に不愉快な、化物の声だった。

白の化物（後書き）

バトルシーンを読むのは好きだが、書くのは難しいと判明。

この辺りから長い説明パートに入るので、話をまとめるためにしばらく更新停滞します。

それでも気長に待ってけると嬉しいです。

マヤカシと人間（前書き）

久しぶりの更新です。

やたら長い解説パート（伏線回収のつもり）に入ります。

マヤカシと人間

最初、俺の身体に巻きついていているのは、縄か植物の蔦かと思った。けれど、ソレは生き物のように動いて、俺を締め上げた。

『人間、お前はどれだけ戦えるかな？』

耳元で囁かれた不愉快な声。

そちらに顔を向けると、そこには先ほど以上に化物の姿をした化物がいた。

そこにあつたのは、赤い眼をした蛇の頭部。だが、その下は鱗に覆われた四肢のない身体ではなく、ムカデのような無数の小さな足が生えた胴だった。しかも、異常に長い。その長さを利用して俺を拘束している。

ものすごく気持ち悪い。

先ほどから服の上をウゾウゾと動く感触があるのは、その細かい足が蠢いているせいだろう。そして、この気持ちの悪い生き物は先ほどの兎に似た化物の転変した姿に間違いない。

あまりの気持ち悪さから俺は拘束を振り払おうともがくが、全く拘束が緩む気配はない。

『動くな』

その台詞は俺に向けられたものではない。

それに気が付いたのは、目の前で緑新が派手に転んだせいだ。彼

女の足にも、化物の白くて長い身体が巻きついていた。

どうやら彼女は化物の注意が俺に向いている隙に、少女を助け起こそうとしてくれたようだ。しかしそれを化物に感付かれた。

緑新は顔を上げたが、起き上ろうとはしなかった。足を拘束されてはいるが、両手足は自由だ。その気になれば起き上がれるだろうに、彼女は倒れたまま化物を睨んでいる。

その様子を見て俺は小さく舌打ちした。

俺が捕まったりしなければ。

すると、それを見た化物が笑う。

『勘違いするなよ、人間。これはお前らがよくやる人質なんてもんじゃない。お前など捕まえなくても、そいつを殺るのは簡単なことだ』

俺の心を読んだかのように、化物は言う。

『ただ、その間にお前らに逃げられては少々面倒だからな。…それにしても、こうしてみるとますます理解できないな。雨月の使いどもは何故お前ごときを“我が君”と間違えたのか』

化物の蛇の頭部がぐぐつと近づいてくる。それに吐き気を感じながら、俺は口を開く。

「お前らがさっきから話してる、その“我が君”ってのは何なんだ？」

それは先ほど、緑新から訊こうとして訊けなかった問いだ。

少女が、その“我が君”とやらの贄とはどういうことなのか。それが本当なら、彼女が捕まっていたあの社（やしろ）が“我が君”の社で、彼女を監視するようにうるついていたあの蛇たちが“我が君”なのだろうか？それとも、他にいるのか。

どっちにしても、俺から彼女を奪うことは許さない。

「答える、“我が君”って何なんだ？ そいつは彼女に何をする気だ」

俺がそう言うと、化物は探りを入れるような目で俺を見た。

『…へえ、これは驚いたな。お前は本当に“我が君”を知らないのか。“我が君”が封印されてから、まだ二十年も経っていないというのに。人はそんな簡単にものを忘れる生き物なのか、それとも俺達のことなど、たいした脅威と見なしていないと？』

まるで責めるような、落胆するような“声”で化物は話す。
そんなふうに言われても、俺は本当に何も知らないのだから、どうしろというんだ。

『…違うわ。その子は、私達の存在そのものを知らなかった。だからきつと…遠い異国から来たのよ』

緑新が、俺を庇うように声を上げた。

化物は緑新を一瞥すると、俺に視線を戻して『それは面白い』と笑った。

『いいだろう人間、お前に教えてやる。“我が君”は俺達の

絶対的な王だった存在だ』

その呼称からして、それとなく想像はついていたが…、

…だった、だと？

過去形で語られたことに、何か意味があるのか。

『俺達の世界は弱肉強食じやくにじやくきやうじゆくで成り立っている。強い者がすべてを支配する権利と義務を有する』

そして、化物は続けて話し始めた。

“マヤカシ”と“マヤカシ”の王がどういう存在なのか。それは、緑新からは全く聞かされなかった“マヤカシ”の本質に関する話だった。

“マヤカシ”の王に血筋など関係ない。

ただ、強い者が王になれる。弱き者は無謀にも強者に挑いどんで死を選ぶか、強者に服従するかのどちらかの生き方しかできない。それが“マヤカシ”達の常識であり、誰が決めたわけでもない本能的なルールなのである。

そして、“我が君”に敵かなう者などいなかった。それゆえに“我が君”はすべての“マヤカシ”を統べる絶対的な王だったのだ。と。

『かつてこの森の周辺には多くの人間達が住んでいたことは知っているか？』

そんなこと、知るはずもない。

俺が“こつち”に来たのはほんの少し前なのだから。“こつち”で俺が出会った人間はあの少女だけだ。

『だが今はもういない。その理由は何だと思っ？』

質問しているのはこっちだというのに、化物は俺に問うてくる。しかし、その問いに緑新が顔色を変えた。続いて焦ったような声を出す。

『それは……っ』

『黙ってる。低級』

『……』

俺には分からないやりとりだったが、そこで俺はあることを思い出した。

緑新は、俺が“マヤカシ”について何も知らないことを喜んでいた。それには何か理由がある。それも、人間に対して後ろ暗い理由が。

それは、化物の口からあっさり語られる。

『それは、俺達が人間を狩ったからさ』

そつちから質問してきたくせに化物は俺の返答を待たず、答えを告げた。

それを聞く緑新は無表情だが、その視線は下を向いている。

『俺達と人間はお互いの存在を認知して以来、ずっと争い続けてきた。言っておくが、先に仕掛けてきたのはお前達の方だ。俺達を化物と罵って、無断で領域に踏み込み、意味もなく殺し尽くそうとした』

『それは、私達が人を喰うからよ。彼らが私達を害獣と判断して

排除しようとしたのも仕方がないことだった』

化物の説明を修正するように、緑新が声を挟んだ。
対して化物は、そんな緑新を小馬鹿にするような眼で見る。

『なら、俺達が人を喰うのも仕方ないことだ。人間達が鹿や兎を喰うのと何が違う？俺達は人を喰らうが、人を絶滅させようと考えたことはない。だから、必要以上に奴らを殺すことはなかった。人間どもが、争いをしかけてくるまでは、な』

緑新はその言葉を聞いて沈黙する。けれど、決して納得したわけではないだろう。その目は化物を睨んだままだ。

『本来なら、人間と俺達の力の差は歴然だ。奴らが俺達を滅ぼすのは到底無理なはずだった。…だが、人間はいつのまにか、俺達に對抗しうる妙な力を身につけていた』

普通の人間が生身で“マヤカシ”とやり合うなど無謀なことだ（俺が言っても説得力はないが）。

彼らの姿は個々によってさまざまで、緑新はそれを偽りの姿だと言っていたが、決して虚仮威こぼせではない。その爪や牙は簡単に人の皮膚を引き裂き、骨を断つことができるだろう。さらに、先ほどの緑新の蹴りの威力を顧みるに、その筋力も相当のはずだ。

もともと人間はヤワで壊れやすい生き物だ。単体では、普通の熊や狼にだって敵わないだろう。だが、その分人間は知能が高く、それによって様々なものを生み出すことができるのだ。

化物が言う“対抗しうる妙な力”とは人間の生み出した武器兵器のことだろうか？

俺が想像したのは、剣や弓（…いや、ミサイルや戦車かもしれない）などである。

化物が詳しく話すかと思っただが、その力についてそれ以上触れなかつた。

そして、その不思議な力によって人と“マヤカシ”の力関係は揺らぎ、争いは苛烈を極めたということだった。

『 そんな時、その力関係を一瞬で元に戻したのが、“我が君”だ』

それだけ“我が君”の力は絶大だったのだ。

不利だと思われた戦況でも、一度“我が君”が介入すれば、勝利は確実だったらしい。

かつて争いが始まる前までは、人間達に“我が君”の存在は知られていなかったそうだが、奇しくもその争いが切っ掛けでマヤカシの王 “我が君”の存在は多くの人間に認知された。そして、やがて彼らはその姿を見ただけで無力化し、恐れ慄いたのだという。

『 だけど、ある時突然“我が君”はおかしくなってしまったのだ』

そう言った化物は、何故かとても嬉しそうに笑った。

“我が君”のことを話す化物は本当に誇らしげで、畏敬の念すら感じられたのに、その“我が君”がおかしくなったという話をして笑っている。それは、変ではないか？

『 あの方は俺達も人間も見境なく、その金の眼に映ったものすべてを消そうとしたのだ』

化物が続けた言葉の一片に、俺はぴくりと反応した。

…金の眼？

偶然か？それとも…

「…そいつは今どこにいる？」

思考がまとまらないまま、気が付けば俺はそれだけを口にしていた。

“我が君”とは一体何なのか　今の説明だけですべてを理解したわけじゃない。

そいつが、俺の…少女（名前を呼べないことが苛立ちを募らせる）を脅かすのなら、もっと知らなければいけない。

“こつち”に来てから、力はとても強くなった。化物達を簡単に倒せるくらいに。そして、その力に俺は浮かれた。この力さえあれば、大丈夫だと思い込んだ。“こつち”のことを何も知らなくても、問題ないと過信していた。

俺は、なんて無知なんだろう。

返答を待つ俺に、化物はしばし沈黙していた。ギチギチという音はまだ僅かに聞こえていた。

『…それは俺も知りたいな。“我が君”を正気に戻す方法を探すために、あの方を封印することにした　らしいが…それに関する詳細は俺も知らん』

知らない？

あれこれと詳しく話してたくせに、その重要な一点を知らないとはどういうことか。

もしくは、嘘について誤魔化そうとしているのか。

俺が疑心を抱いていると、緑新の声が聞こえた。

『当時の貴方はまだ幼かった。だから、あえて悟られないようにしたんでしょう』

それは化物に対して言ったというより、俺の疑問に答えたような言い方だった。

化物もそれを感じ取ったらしく、俺と緑新の顔を交互に見て目を細めた。

『……その事と、俺が我が君の所在を知らないことは関係ない。俺は当時の“我が君”を見ているし、狩りにも加わっていた』

化物はイラつくように言った。当時は幼かった、と言われたことが気に障ったようだ。

人間と違って、マヤカシの年齢は外見から全く判別できない。しかし、今の会話を聞くと、緑新はこの化物より年上なのかもしれない。

『いいえ、関係あるわね。貴方は我が君のことをよく知らない。だから、リオ様は貴方が我が君の封印を解いてしまうことを懸念したのよ』

『へえ……。それはまたどうしてかな？』

『貴方はマヤカシの中でも、特に戦闘本能に忠実だと言えるわ。貴方はずっと、我が君を倒して屈伏させたいと思っていたんでしょう？』

『その何が悪い？』

化物は悪びれる様子もなく、笑みを浮かべて訊き返した。
すると緑新はさらりとこう言い返した。

『別に悪いことではないわね。我が君が正常な状態なら、むしろ大歓迎だったと思うけれど』

言葉の果てに（前書き）

またしても更新遅れました。

次話もかなり難航しているのですが、更新がまたしても遅れる可能性があります。

言葉の果てに

『別に悪いことではないわね。我が君が正常な状態なら、むしろ大歓迎だったと思うけれど』

俺の勘違いでなければ、今彼らが話していた事は、仮にも“我が君”という尊称で呼んでいる相手に対する反逆行為ではないだろうか。

そんな話を堂々と誇るように話すとは、一体どういうことだ。

地面に伏した状態のまま、緑新は言葉を続けている。

『でも、今は駄目よ。少なくとも、あの“我が君”相手に反抗してはいけない』

今までにないほどに強い意思の込められた声。

さすがの化物も興味が湧いたのか、緑新の方をじっと見ていた。

『それは、お前から見た感想か？』

化物がそう問うと、緑新は自虐的な笑みを浮かべた。

『貴方も見れば分かるわよ。一目見ただけで、あの方に逆らおうなんて気は起きなくなる。 “強い者に服従する” あの時ほど、

その本能を強く自覚した事はないわ。』

『へえ、それは楽しみだ』

『…やっぱり、貴方は不安要素ね』

緑新はそつと溜息を吐いた。

『過去にも、“我が君”に挑んで見事“我が君”を殺せた者もいた。残念ながら相討ちだったそうだけど。それからしばらくの間、次の“我が君”が決まるまで大変だったわ。私達に秩序という概念はないもの。そういう意味では、“我が君”は私達の秩序そのものと言える存在ね。でも、今の我が君は違う。アレはもはやマヤカシとは呼べない存在になってしまった』

『ほう？』

『貴方の…いいえ、私達の理屈はもうあの方には通じない。でも、あの方以上に強い存在もない。だから、眠らせてあげてほしいのよ。少しでも早く、傷が癒えるように』

『……くっ……くっくっ』

直接脳に響く声はギチギチという奇妙な笑い声ではなく、妙に人間的である。

『ああ、そうか。お前は知っているんだな？“我が君”が狂った理由も、その封印とやらのことも』

『…ええ』

経った今まで、俺を置いて話は進んでいたが、ここで急に話が止む。

化物は無言で緑新をじつと見て、次に俺の顔を覗き込んだ。しかし、すぐに目を逸らし、次に見たのは、それまで放置されていた少女だった。

「……っ」

それに、俺はわずかに息を呑んだ。彼女に何かしたら、許さない。

『…成程』

一瞬前まで、無関心のなかった少女を見下ろす化物は何か気付いたようにほくそ笑む。

そうして化物は緑新に視線を戻す。

『貴様は、何故この人間達を守ろうとする？』

唐突の質問に俺は少々驚いた。それは、俺も気になっていたことだが、何故それを今訊く？

緑新に目をやると、彼女も少し驚いたような顔をしていた。だが、すぐに攻撃的な笑みを浮かべてこう返答した。

『…こんな罪もない人間の娘を、“我が君”の贄にするわけにはいかないからよ。我が君に必要なのは、“穏やかな眠り”だけよ。それを邪魔して、生贄を与えることにどれほどの意味があるのかしらね』

『本当にそうか？』

『ええ。私は罪もない人間が我が君の手によって無残に殺されるなんて許せないの。これ以上、あの方を苦しめないでほしいから』

『それは嘘だな』

『……なんですって？』

『お前は何かを隠しているだろう』

『何を言っているのかしら？』

『この娘…』

その言葉に、俺と緑新が反応した。

俺の方は少女に危害を加えられるのではないかと気が気ではなかったが、緑新の反応は俺のそれとは違うような気がした。

緑新の反応を見た化物は、ふつと笑ったように見えた。

『この娘は“我が君”に捧げる贄。俺は、ただそうとだけ聞かされていた』

『…それでいいじゃない。他に何か知りたいの？彼女の胸の大きさでも気になったのかしら？』

人間にしか通じないであろう皮肉を使う緑新は本当に人間じみている。だが、何故だろう。今まで普通に話していた彼女が、どうして急に人間にしか通じない皮肉を化物相手に使ったりしたのか。

コイツが動揺している…？

化物は緑新の皮肉に当然気づくことなく、あえて何も言わなかった。そして、今度は俺の方に視線を向けた。

『人間よ。本当はお前も知っているんじゃないか？この娘が何なのか…お前はそのためこれを助けに来たのではないか？』

今度は一体何を言い出したんだ？

俺が彼女を助けたのは…偶然のようなものだった。ちょっとした正義感、いやヒーローにでもなったつもりで、俺はあの蛇たちを殺

した。

だが、直にあの少女に相對した時、俺は言いよのない気持ちに囚われた。

何故だが、惹かれた。どうしようもないくらいに。

俺は一目惚れなどという世迷い事は信じない。

だが、もしこの気持ちを表現できる言葉がそれしかないのならば、一目惚れでもなんでもいい。

どうしても側に置いておきたい。

絶対に離したくない。

だから、俺は彼女を守るし、彼女を俺から奪おうとするものすべてを退けたいと思った。ただそれだけだ。俺にはこの化物が何を言っているのか、理解できない。

『…一体何を言っているの?』

口を開いたのは、俺ではなく、緑新だった。敵しい顔つきで、化物を睨んでいる。

『先ほどの話程度で、貴様が自らの身を危険に晒してまでコイツらを守る理由になるとは思えないな』

『ちよっ…』

化物の勝手な言いように緑新は声を上げるが、化物は気にせず言葉が続ける。

『ならば、この人間は、贄の娘を我らから奪還するためにはやってくる。そしてお前はそれを知って、その人間に協力している…違うか?』

『…ずいぶん勝手な妄想をするのね』

『我らのことを知らないただの人間が我らの森に偶然入り込み、偶然この娘を助け、なお且つ上月達を殺すだけの力を持っているなんて、あり得ると思うのか？』

『……………』

それに関しては、緑新は何も言い返せない。

だが、俺にだって説明することはできない。

俺がマヤカシのことを知らないのは、俺が“こっち”の住人じゃないからだ。この森に入り込んだ理由は何の事はない、気が付いたら何故かこの森に居ただけだ。そしてあの少女に会ったのも偶然で、マヤカシを殺せた理由に関しては、俺も良く分からない。ただ、俺にはそれが当たり前のようにできた。ただそれだけだ。

俺達の無言をどう受け取ったのか分からないが、化物は言葉を続けた。

『この娘の利用価値は我らの側だけでなく、人間側の方にもあるということか』

まるで何もかも分かったかのような口調で、独り言を言う。

『…ただ単に、彼女を不憫に思った人間達が彼をここに送り込んだ、という可能性も十分にあると思うけれど。貴方が妄想するのは勝手だけど、それを決めつけるのはどうかと思うわ』

『もう知らぬふりは止めたらどうだ。その娘は、数十年前の我が君と何か関わりのある存在なのだろう？』

沈黙が落ちた。

『…いやむしろ、その娘が我が君を狂わせたんじゃないのか？』

言葉の果てに（後書き）

こういう答え合わせみたいな話を書くのは難しいですね。前後の話と矛盾するところがあつたらすみません…。

次回は私が特に書きたいと思っていたシーンが到来すると信じています。

…なんか他人事みたいな言い方ですが。

「遠い記憶」回想1（前書き）

本編の続きが書けない…。

ネタは浮かんでるんですが、文章にできないという困った状況に。そんなわけで今回は回想編。短い上に、これだけだと意味不明。

今回は過去回想なんで、本編というより準本編のような扱いです。

超短いです。読まなくてもまあ大丈夫です、多分。

「遠い記憶」回想1

周囲に求められるままに、俺は動いた。

気づいた時には、俺の周りにいた奴らは俺よりもずっと弱くて、当然のように俺に傅き、それでいて俺の力を求めた。

これじゃどつちが主おんこなんだか分かったもんじゃない。

だが、俺が倒すべき相手とやらは意外に手ごたえがあった。そのおかげで結構楽しめたから、それでも良かったんだ。

「あの、貴方はそこで何をしているの？」

そこに居たのは、奇妙な少女だった。

それは、こちらを見て、間抜けな問いを発してきた。

…この少女は、一体何を言っているのだろう。

その問いを、お前等が、俺にするのか？

俺はその少女を見る。ただじつと。

すると少女は突然おどおどした様子になった。
それを見て俺は、ああ、やはり、と思う。

「あ、あの私は…ええと…別に迷子とかじゃ…ない、から」
よく分からないことをぶつぶつと言っている。
ぼそぼそとした声で何かを言っている。

人間の娘が、俺に向かって何かを言っている。

『お前は…』

「えっ？」

少女が驚いたような顔でこちらを見た。
俺はその顔に向けて手を伸ばす。

「お嬢ちゃん、危ない！」

『……………』

「…え？」

人間の声が聞こえた。

「お前のその手は炎に焼かれて
いるぞ」

呪いの言葉が聴こえた。

ぼつと激しい音を立てて、俺の手が燃え上がった。

「……っ!？」

目の前で炎が上がったことで、少女の目は驚きに見開かれた。

対して俺の方は、さほど驚く必要もなかった。

人が近くにいた事には気づいていたし、奴らが“こういうこと”
が出来ることも知っていた。

案の定、茂みから複数の人間が飛び出してきた。

「お嬢ちゃん、大丈夫か!？」

「え…なに、が…?」

人間の一人は混乱する少女の腕を掴んで、声をかける。

そして彼らは少女を守るように俺の前に立った。

「こいつはマヤカシだ。それもかなり高位種に違いねえ!」

人間たちが、こちらを睨みながら叫ぶ。

これが、俺と人との当たり前の関係で、特に何の疑問もない。

燃え盛る手を見ながら、俺はぼんやりとそう思った。

ああ、だけど、

思えばこれが、彼女との最初の出会いだったんだ。

「遠い記憶」回想1（後書き）

次回こそ、ちゃんと本編を書いてみせる…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7027r/>

黒の獣と白の少女

2011年10月8日18時48分発行